

# 水稻新奨励品種「粒すけ」 栽培暦

## 栽培のポイント

1. 基肥窒素量を「コシヒカリ」より多くすることで、初期生育の促進を図る。
2. 栽植密度を55~60株/坪とすることで、茎数・穂数を確保し、適正な籾数(3万1千粒/m<sup>2</sup>)を目指す。
3. 中干しを確実に実施することで、過繁茂を防ぎ、根張りをよくする。
4. 登熟を良好にし、粒張りを良くするために、穂肥は必ず施用する。

## 「粒すけ」の特性とそれをいかした生産の基本方針

「粒すけ」は、「コシヒカリ」に比べ倒伏に強く、収量性が高いため、安定的な生産が見込めます。なお、倒伏しやすい5月の晩植「コシヒカリ」を「粒すけ」に替えることで、より安定した米生産を行えます。粒の大きさを生かした高品質・良食味米の生産を行うことで、様々な用途に合う品種として幅広い需要を喚起し、所得向上・経営の安定を目指しましょう。



熟期	「コシヒカリ」並み
耐倒伏性	やや強
玄米	「コシヒカリ」並み
外観品質	「コシヒカリ」並み
食味	「コシヒカリ」並み~やや良

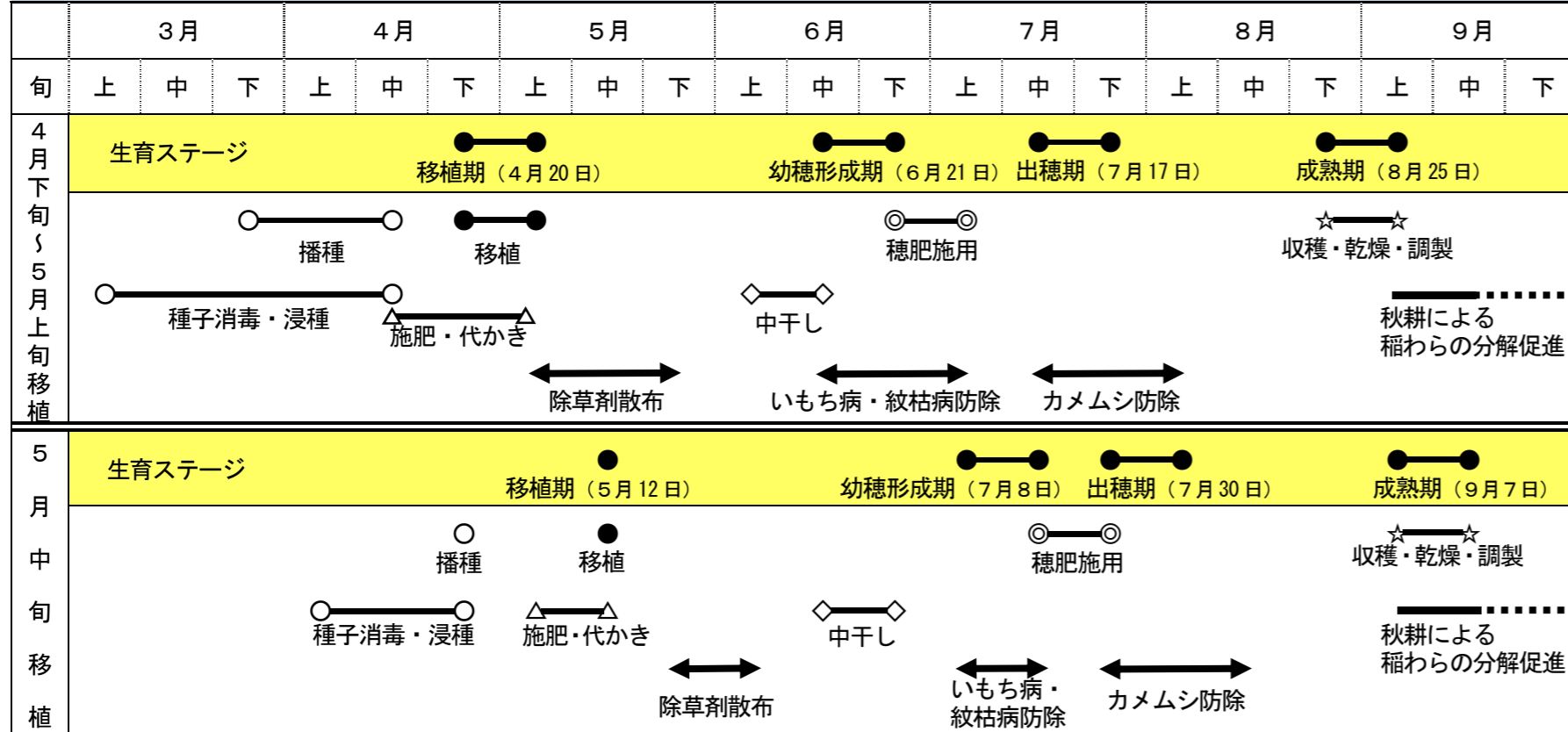


## 生育・収量の目標値

幼穂形成期の生育			葉色値		穂数 (本/m <sup>2</sup> )		籾数 (粒/m <sup>2</sup> )	登熟歩合 (%)		目標収量 (kg/10a)		千粒重 (g)		整粒歩合
4月下旬~5月上旬 移植	5月中旬 移植	草丈	(SPAD値)	葉色 票値	4月下旬~5月上旬 移植	5月中旬 移植		4月下旬~5月上旬 移植	5月中旬 移植	4月下旬~5月上旬 移植	5月中旬 移植	4月下旬~5月上旬 移植	5月中旬 移植	
590 (33~35本/株) (砂質土)	550 (30~33本/株) (砂質土)	65cm	39	5.0	440 (24~26本/株) (砂質土)	400 (22~24本/株) (砂質土)	31,000 前後	85~90	85	630	600	23.0	23.0	75% 以上
550 (30~33本/株) (壤質土・粘質土)	(30~33本/株) (壤質土)	以下	前後		400 (22~24本/株) (壤質土・粘質土)	(22~24本/株) (壤質土)							23.5	

<参考> 「コシヒカリ」の4月下旬移植の生育・収量の目標値

430~560 (24~31本/株、坪60株移植時)	70cm未満	29~33	3.5~4.0	400 (22本/株、坪60株移植時)	32,000以下	80	540	21.0
-------------------------------	--------	-------	---------	------------------------	----------	----	-----	------



注) 生育ステージの時期は4月下旬~5月上旬移植では4月20日移植、5月中旬移植では5月12日移植の千葉市における平成27年~令和元年の平均

## 晩植 (5月中旬移植) での注意点

- ・移植時期がこれより遅れると、収量や玄米外観品質が低下しやすいため、極端な晩植は適さない。
- ・高温期の育苗となることから、苗のやけや病害の発生を防止するために温度管理に注意する。
- ・適正な籾数は4月下旬移植と同一であるが、籾数過剰を防ぐために基肥窒素量を1kg/10a程度減らす。
- ・登熟期間が4月下旬移植より2日程度長くなるため、刈取適期に注意する。

## 健苗育成

- ・播種量：種籾が「コシヒカリ」より大きいので、播種粒数が「コシヒカリ」と同じなるように、1箱当たりの播種量を「コシヒカリ」より1割程度多い150g(乾籾重)とする。このとき、種籾袋1袋(4kg)で育苗箱26~27枚の播種が可能である。
- ・育苗時の施肥量：「ふさこがね」と同等の1箱当たり窒素1.2~1.5gとする。

## 移植時の注意点

- ・栽植密度：55~60株/坪(株間18~20cm)とし、疎植にしない。
- ・1株植付け本数：3~5本/株。

## 中干し

- ・幼穂形成期の目標茎数の80%(60株/坪移植で、砂質土で26本/株、壤質土・粘質土で24本/株)に達したら中干しを行う。特に、近年は分けつ期間が高温傾向にあり、茎数や籾数が過剰になりやすいため、田面が固まる程度まで確実に中干しを行う。

## 品種特性を発揮させるための施肥方法

### ★土性別及び移植時期別の基肥施用量 (kg/10a)

土性	窒素・移植時期		りん酸	加里	4月下旬移植 「コシヒカリ」 標準窒素施用量
	4月下旬~5月上旬	5月中旬			
砂質土	6~8	5~7	7~9	8	3~4
壤質土	3~5	2~4			2~3
粘質土 (房総南部)	2~3	1~2			2

- ・基肥窒素は上記の値を基準とし、栽培する圃場の窒素肥沃度に応じて「コシヒカリ」の標準窒素施用量の1.5(壤質土及び粘質土)~2倍(砂質土)を目安に施用する。
- ・5月中旬移植では、4月下旬~5月上旬移植より基肥窒素量を1kg/10a程度減らす。

### ★土性別の穂肥施用量 (kg/10a)

土性	窒素	加里
砂質土	3	3
壤質土	3	3
粘質土 (房総南部)	2	3

- ・穂肥は粒張りの良い高品質米を生産するために必ず施用する。
- ・最適な穂肥施用時期は出穂期前18日(幼穂長の平均が1cmの時、幼穂形成期の約1週間後)である。

### ★全量基肥栽培における注意点

- ・使用する肥料は、初期の溶出が一定期間抑えられた後に溶出が始まり、80%溶出期間が90~100日タイプの被覆肥料を含む「コシヒカリ専用」等の全量基肥栽培用肥料(一発肥料)とする。なお、同肥料の窒素成分割合は速効性(基肥)50%:緩効性(穂肥)50%であるため、砂質土等の窒素肥沃度の低い圃場などで、穂肥窒素に比べて基肥窒素を多く施用する必要がある場合には、不足分の基肥窒素をあらかじめ高度化成肥料等で補う。
- ・りん酸や加里の施用量が不足する場合には高度化成肥料等の施用で補う。

## 病害虫防除

- ・斑点米カメムシ対策：圃場を十分に観察し、適期防除を行う。なお、5月中旬移植では周辺圃場より出穂期が遅くなり、加害が集中する可能性があるため、確実に防除する。
- ・いもち病対策：常発地帯では移植時に箱施用剤を散布し、防除に努める。いもち病抵抗性は「コシヒカリ」より強いが、本田で葉いもちの発病が観察されたら、防除を行う。

## 収穫・乾燥・調製

- ・刈取適期は4月下旬移植では出穂期後38日前後、5月中旬移植では出穂期後40日前後であり、穂全体の85%が黄化したとき(帯緑色籾歩合15%)のときを目安とする。
- ・粒が大きいので、籾すり機のロールとロールの間隔を「コシヒカリ」よりやや広く設定する。

その他の技術は慣行の基本技術で栽培する。

千葉県・千葉県農林水産技術会議